

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 92 号

平成 21 年 12 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### ヒルティ

#### 「眠られぬ夜のために 第二部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波文庫）より（7）

1 月 3 日

われわれが次第に年をとるにつれて、死後も別の生活をつづけるために、またそこでのわれわれの席を決めるためにも、なおより多くの愛を習得するというこの世の最後の課題がそれだけ重大なものとなる。この最後の卒業試験に臨んでは、どんな学問や芸術も全く役に立たない。

1 月 6 日

人それぞれが一つの祝福の泉とならねばならない。その泉には、一方から神の祝福が、その人の我意にすこしも妨げられずに、自由に流れこむことができ、次にはそれが、その人に接するすべての人たちの方へ流れ出ていく、というのでなければならない。このことが起らない限り、その人の生涯の営みは大部分失敗したのだ、といってよい。

1月9日

愛をもってすれば、あらゆるものにうち勝つことができる。愛がなければ、一生の間、自己とも他人とも戦いの状態にあり、その結果は疲労困憊に陥り、ついにはペシミズムか人間嫌いにさえ行きつくほかはない。しかしながら、愛の実行はつねに、初めそれを決心するのはむずかしく、やがて神のみ手に導かれてそれを行ないうるまで長い間たえず習得すべきものであって、愛は決してわれわれにとって自然に、生まれながらに備わっているものではない。ついに愛をわがものとした人には、他のいかなるものにもまして、より多くの力ばかりか、より多くの知恵と忍耐力をも与えられる。なぜなら、愛は永遠の存在と生命の一部分であって、これは、すべての地上のものとはちがって、老朽することがないからである。

1月10日

いつまでも同じ考えに、そればかりか同じ思い出にこだわってはいならない。過ぎ去ったことは済んだこととして、現在なすべきことを行わなければいけない。「処世の知恵とは、ある一事を行い、それをなしとげることだ。あなたがなしうる最もよい、最も正しい事をしようと努めなさい。しかし、そうしたあとは、それをすて措くがよい。」

1月12日

よくよくあなた方に言うておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになる。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくないところへ連れて行くであろう。(ヨハネ 21・18)

人生は、老年にいたって、ますます美しく、立派になることができ、またなるべきものである。しかし、より安楽になるわけではない。それどころか、前には生活に楽しさを添えてくれた多くの人びとがいなくなり、さまざまの興味も消えうせてゆく。そしてヨハネによる福音書 21 の 18 でイエスがペテロに語った言葉を思い出させるような、多くの事柄がおしよせてくる。たしかにわれわれは連れて行かれるのだ。しかもしばしば、自分が欲しくないところへ、であって、決してのんびりした俗人たちのいただく老後の理想のように、仕合わせな子や孫たちに囲まれた心地よい安らかな生活へ、ではない。けれども、おそらく、ますます広い、すぐれた見識へ、と導かれるであろう。かくて「多くの人を恐れさせる死も、つねにわれらを元気づけ、目ざめさす呼び声」であり、慰め手であって、怖るべき姿をして現われるわけではない。

1月13日

このように、あなた方にも今は不安がある。しかし、わたしは再びあなたがたと会うであろう。そして、あなたがたの心は喜びに満たされるであろう。その喜びをあなたがたから取り去る者はいない。その日には、あなたがたがわたしに問うことは、何もないであろう。よくよくあなたがたに言うておく。あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい。そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう。(ヨハネ 16・22 - 24)

(ヨハネ 16・22 - 24)

これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。(ヨハネ 16・33)

人間の生活は、神の恵みによって、また恵みの中であって、堅固になっていないかぎり、えてして傲慢になりやすく、また意気阻喪しやすいものであって、しばしばこの一方の極端から直ちに他の極端へ移りさえするという事は、まぎれもない事実である。だから、常に祈りにたよって、自分の力に頼まぬことが、すべての地上の道のうちで、最も確実な道である。人間存在の一切の謎を解明し、しかも人生を一つの課題とみなし、それに満足すべき、結局幸福な解決を与えうるような哲学など、決して発見されないだろう。人生は断じてそういう(理性をもって解明しうる)ものではなく、まただれにとってもそれはそうではない。人生のかなりの部分はつねに暗く、かつ困難なものであって、この点について、だれも思いちがいをしはけない。そこで神への信仰がこの欠陥を埋めねばならない。ただこの信仰によってのみ、心の平安が生じ、真の幸福感が得られるのである。ヨハネによる福音書 15 章、16 章 22-24, 33。

1月21日

人がみなそれぞれに持っている十字架を、われわれもまた受け取り、背負うべきである。それをふり捨てようとしてもなんの益もない。むしろそのために一層重くなるだけである。しまいには、十字架がなくなると、もの足りなく感じるほど、それに慣れてしまうことさえまれではない。ところがわれわれは、たいていの場合、もう十字架の必要が全くなかったとき初めて、その意味を悟るのである。

1月24日

正しく送られた人生において最後にいただくモットーは、必ずや平和と親切という言葉であるに違いない。そうでなかったら、その生涯はたとえどんなに立派に見えようとも、決して正しい道を経たものではなく、神のみこころにかなう正しい結果を持つわけでもない。しかしこのことは 短命に終わった、特にすぐれたわずかな人々を別として、たいてい、かなり晩年になってから成就するものである。

1月30日

そこでイエスは彼らに答えて言われた、「わたしの教えはわたし自身の教えではなく、わたしをつかわされたかたの教えである。」

(ヨハネ7・16)

わたしを信じるものは、聖書に書いてある通り、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう。(ヨハネ7・38)

人間の力の秘訣は、神の道具であるという性質にある。なぜなら、すべて永続的な真実の力は神のものであって、人間のものではないからである。エゴイズムと超感覚的世界に対する不信とが、人間の弱さの根源である。

ヨハネによる福音書7の16,38。

1月26日

おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう。(マタイ 19・29)

自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。

(マルコ 8・35)

キリスト教の真理を本当に人に納得させる証明については、全くただ一つ、この教えが人々に与える幸福よりほかにない。その他の事実、たとえば、この教えが神の言葉であるとか、キリストは神の「ひとり子」であって神の真理を告知するために召された者であったというようなことは、できればそれをあたまから信じてかかるほかにないことなのだ。またその当時から、最もすぐれた人びとがこの信仰に従ったというような事実でさえ、疑おうと思えばわけなく疑うことができる。なぜなら、それを証明するのはきわめてむずかしいからである。けれども、キリスト教が幸福をもたらすという事実は、われわれが自分で感じることであり、生涯にただ一度そのような幸福を持ったという思い出だけでも、すべての教理にまさってはるかに確実な事柄である。

ところが、現代の宣教師たちは、この世においては、ただ十字架や迫害やあらゆる種類の苦難を約束するだけで、また、多分このあとに続く来世の生活においても　これもまたさしあたりそれを信じるほかはない　、確実ともいえない栄冠を約束するにすぎない。…彼らは、そういうことをする代わりに、福音書が告げているように、どんな諦念もがすでにこの地上の幸福によって百倍もつくなわれること、また、この道は困難な道などでなく、むしろ人生の多くの危険に対抗してわれわれが進みうる最も善い、最も確かな道であることを、人々に説きすすめるならば、ずっと成果を上げることができよう。マタイによる福音書 19・29、マルコによる福音書 8・35、詩篇 97・11。…

1月31日

あなたはこの人生において、一人の善き人間になるべきである。つねに善き霊の励ましにしたがい、その他すべてを拒むような一人の人間になりなさい。

それ以上のことは、たとえそれが、しばしば世間で大いにもてはやされようとも、重要なものではない。現在の生活にとっても未来にとっても、そういう事柄はほとんどかかわりのないことだ。

2月3日

愛のとりわけありがたい点は、ただ愛し返されることだけでなく（これは、その愛がいくらか長続きし、また強いものなら、ほとんど常に起こることだが）、それよりもむしろ、愛する子ことで自分が即座に強められ、活気づけられることである。愛は、それがなければあまりにも冷ややかなこの世にあたたか味を添えるもので、それだけでもすでに一つの幸福である、さらに愛から生じる一切のよきものを度外視しても。愛はまさに魂のいのちであって、愛をすっかり捨てさせる者は、その魂をも失うことになる。これは永遠につぐないがたい損失である。

魂を失った人は生きつづけることができない、現世の生命ばかりか、未来の命をも失ってしまう。

2月4日

善き思想は決して人間が自分ひとりで作ったものではない。ただ、その思想が人間を通して流れていくにすぎない。こうして善き思想が形を得て行為や言説や文章となったなら、その際われわれの手柄といえ、その思想に対して心を開き、それに仕える用意を怠らなかつたという点にあるだけである。...

2月8日

どんなささいなものをも浪費してはならない 時間でも、労力でも、また不必要な、仕甲斐のない事柄のための骨折りでも、活力や視力や金銭やその他の物資でも。これがらくに人生を過ごす最もよい道である。

それはまた神のみこころでもある。なぜなら、神は「秩序の神」であって、たとえ「天才的」なものであっても無秩序のもとには、神はとどまり給わぬからである。…

2月10日

人生の意義は、この人生をば、ますます高い目標を追って進むこの次の存在のための学校だと見なさない限り、どんな哲学や宗教によっても、十分明らかにはされない。つまり、この学校時代にわれわれは、この地上ではまだわが身につきまとう動物的なものを、肉体とともに最後にすっかり脱却して、自由な精神的存在となる用意しなければならないのである。…

2月11日

人生の目的と目標は、正統信仰(オーソドクシー)に到達することではない。この点では、宗教改革時代もはなはだしく誤っていた。そうではなく、それは善き人間となること、すなわち、できるだけ実際に神の近くにあるという偉大なことにある。確かに、真のキリスト教こそは、そこに到る最も近い、最もよい道であり、それのみが本当に神のみこころにかなう、しかも歴史的に与えられた道である。

哲学的な人たちや、また私の経験によれば、ユニテリアンの信者やいわゆる「改革主義者」なども、このような結論に達することははるかに困難である、もっとも、神の恩寵はどんなことでもなしとげうるにちがいないが。われわれ人間の思想体系などは、神のはたらきにとってはなんの障害でもない。神の霊のいぶきが一瞬にして破りうるくもの巣にすぎない。



2月12日

そこで主が言われた、「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この桑の木に、「抜け出して海に植われ」と言ったとしても、その言葉どおりになるであろう。(ルカ 17・6)

最初の使徒時代に示された霊的な諸能力は、現代でもなお、たしかに存在している。それは、一時優勢を続ける唯物論的時代思潮のために、ただいくらか後退したというだけである。

ところで、こういう能力を持つ人々は、みずからよくそのことを知っており、他人もまた彼らに接すれば本能的にそれを感じて、欺かれることがない。ただし、かような霊的諸能力は、いたずらに持っているのではなく、実際に活用されねばならない。あなたがたが願っている教会の改新もこの能力に基づいて生まれるもので、教会会議や牧職会議によって、あるいは組合や小教会制によって実現されるのではない。多数の人々のうちに、このような霊的能力が存在しないならば、あらゆる努力も無益である。

これらの能力のうち最上のものは(もしその間に差別をつけようとするなら) 神に聞きいれられる祈りの能力である。なぜなら、この能力はその他の力、たとえば病気の治療、罪の許し、未来の予知などの力をも含むからである。実際、これらの諸能力もまた、ひとり神から、そして祈りに対してのみ、授けられるもので、決して自分自身の、ただそのとき限りの力に基づくのではない。これと異なる意見をいただく人、あるいは、そのような能力を用いずともひとかどのがなすとげられると信じている人は、大いに誤っている。また、何かほかの、この世の宝をこの霊的能力と同列に置いたり、これよりまさっているとさえ考える者も、同じように誤っている。そういう人は決してこの賜物を受けることもなく、また長く保有することもできないであろう。

ルカによる福音書 16の 11-15, 11の 36, 10の 6・19, 17の 6, ヨハネによる福音書 11の 41・42

## 2月13日

だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようか  
と言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求  
めているものである。あなた方の天の父は、これらのものが、こ  
とごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の  
国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべ  
て添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずら  
うな。明日のことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の  
苦労は、その日一日だけで十分である。(マタイ 6・31-34)

よろこんで重荷を負うこと、これが最大の生活「術」である。そ  
れをなしうる人こそ、真に「処世の名人」である。しかしだれでも  
あすのことを思いわずらってはいは、この術を行うことができない。  
ただ神への信頼と、たえず日に日に新たなる信仰によってのみ、な  
しとげられる。マタイによる福音書 6・31-34、ルカによる福音書 11・28-36

## 2月14日

しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測  
り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでな  
いことが、あらわれるためである。(コリント 4.7)

信仰のあつい人びとは、当然最も勇氣ある人でなくてはなるまい。  
なぜなら、彼らは神から不断の援助の数しれぬ約束を与えられてい  
るからだ。他の人がみな気おくれする場合でも、信仰者がいぜんと  
して心の平安を保っているならば、それこそキリスト教の最も効果  
ある説教となろう。ところが、いかんながら、キリスト教は、涙も  
ろい、無気力な、まさに(パウロの言うように)「土の器\*」に入ること  
があまりに多い。だが、そういう者は、ほとんど人をひきつける魅  
力を備えていない。かようなキリスト者は、さらに経験を重ね、他  
人への同情を養うために、ぜひとも苦難をなめなければならない。

...

\* コリント人への第2の手紙 4.7。(訳者注)

2月15日

普通に信じられているよりもはるかに多くの病苦が神経性のものであって、すなわち、神経の全般的な健康状態によって左右される。従って、神経を回復する方法、とりわけ睡眠、よい空気、運動、よい栄養、心の安静によって、治りうるものである。

2月16日

つねに、われわれの思想を活発にはたらかせ、生活のさまざまの琐事(さじ)からのがれさせ、わけても、ほとんどこの世の一番大きな不快ともいってもよい退屈を取り除いてくれるような、比較的大きな仕事に従っていること、これこそ幸福な生活を送るのに必要なものである。

だから、ぜひともあなたはそういった仕事を持たなくてはなるまい。もし持っていなければ、探さねばなるまい。